

鳴海丈

大江戸非情拳

お通夜坊主

龍念



GAKK
M
BUNK

つ や ほう ず りゅうねん おお え ど ひじょうけん
お通夜坊主龍念 大江戸非情拳

なる み たけし
鳴海 丈



学研M文庫

2011年12月27日 初版発行



発行人——脇谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takeshi Narumi 2011 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『お通夜坊主龍念 大江戸非情拳』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター TEL 03-3401-2382

Ⓔ 〈日本複写権センター委託出版物〉

目次

第一話	死美人 しびじん に葬 とむら いの唄を
第二話	夜鷹 よたか が流す血の涙
第三話	女壺 によつぼ に濡れた賽 さい 一つ
第四話	聖女 やみ は闇 すみ に啜 すす り哭 な く
第五話	女狐 めぎつね 姉妹は地獄責めに（書き下ろし）
第六話	首 くび なし娘 むすめ は淫 みだ らにさぐれ
第七話	悪女 わかれ に別離 せつぶん の接吻を

あとがき

343

293 246 214 165 119 61 5

お通夜坊

主龍念

天江戸非情拳

鳴海 丈



学研M文庫

常州大子山書館
藏書章

目次

第一話	死美人 しびじん に葬 とむら いの唄を
第二話	夜鷹 よたか が流す血の涙
第三話	女壺 によつぼ に濡れた賽 さい 一つ
第四話	聖女 やみ は闇 やみ に啜 すす り哭 な く
第五話	女狐 めぎつね 姉妹は地獄責めに（書き下ろし）
第六話	首 くび なし娘 むすめ は淫 みだ らにさぐれ
第七話	悪女 わかれ に別離 せつぶん の接吻を

あとがき

343

293 246 214 165 119 61 5

第一話 死美人に葬いの唄を

一

「龍念さん」

夜具に俯せになっていた年増女が、うつとりとした口調で言った。

「あたしや、もう……体中の骨が蕩けちまったみたいで……こんなの初めてだよ」

腰のあたりに肌襦袢をかけただけの豊満な裸体は、汗ばんで桜色に火照っていた。

髪も乱れて、粹な小万島田が崩れかかっている。

「そいつア大事だな。小唄弁天とまで言われた宇多川菊丸師匠が、骨なし海月になっちまったと知れたら、江戸湊に身投げする若い衆が列を作るだろうぜ」
灰吹きに煙管を叩きつけて、龍念と呼ばれた男は、にやりと笑った。浅黒い

顔とは正反對に、馬のように大きな齒並びが真っ白である。

魁偉な容貌の男であつた。

まず、鼻が大きい。鼻梁が高く分厚くて、南蛮人のような形の鼻である。

眉も太く黒々としている。たつぷりと墨を含んだ太筆で、ぐいっと一直線に引いたみたいだ。

やや奥まつた眼窩に、睫の長い切れ長の目が、光っている。

口もまた、大きい。唇は薄いくらいだが、鱗のように大きくて貪欲そうな口なのだ。

大きな耳朶が垂れ下がって、いわゆる福耳であつた。

年齢は三十歳前後で、まずは、二枚目の部類であらう。

しかし、あまりにも男性的で精力的で、獰猛さすら感じられるので、堅気の女なら敬遠したくなるタイプなのだ。

これだけの〈部品〉を収納しているのだから、顔の面積も広い。普通の男よりも、一回り大きいようだ。

だが、その顔の大きさも、さして目立たないほど、軀の方も大きいのである。全裸で畳に胡坐をかき、煙草を吸っているのだが、肩幅が異常に広く、腕や

足が丸太のように太く逞しい。

胸と下腹部には濃い体毛が密生し、丸い腹のあたりで繋がっていた。

青々と剃り上げた頭さえ見なければ、鍛えぬいた相撲取りとしか思えない、見事な巨軀である。

分厚い胸には、大きな黒い数珠が垂れ下がっていた。

「まあ……憎い文句を言うじゃないか」

気怠げに身を起こした菊丸は、龍念に凄いほどの流し目をくれた。

そこは——神田明神下の通称〈極楽長屋〉の、端っこの宅だった。

六畳に三畳の二間、それに勝手と入口の土間だけの、貧乏長屋である。

男の一人暮らしのわりには、掃除が行き届いているのは、同じ長屋に住むお光という十四歳の娘が、何やかやと世話をしてくれるからだ。

六畳間には、濃厚な情事の匂いがこもっていた。

締め切った障子に、午後の陽光が斜めに差している。

「意外と口が上手いんだね、龍念さんは。小唄の方は、からつきしなのに」

菊丸は、男の広大な背中に、しなだれかかった。

「おいおい。俺の小唄は、そんなに下手なのかい」

龍念は、情けなさそうな顔になる。

「いいじゃないの、小唄なんかどうでも。お前さんには、こんな立派なものがあるんだから……」

女師匠は、龍念の脇の下から頭を入れるようにして、彼の股間に手を伸ばした。

そこには、まるで飽食して眠りこんだ大蛇のように、圧倒的な体積の肉柱が横たわっている。休止状態なのに、普通の男性の勃起したサイズよりも巨きいのだ。

顔や軀と同じように、男の象徴もまた、常識外れの雄大さなのである。

しかも、百戦錬磨の強者である証拠に、黒々と淫水焼けしていた。

両手で柔らかな肉塊を撫でまわしながら、菊丸は、

「本当に凄い。一升徳利みたいに大きくて、石のお地藏様みたいに硬いんだから……しかも、いつまでも果てないし……今まで、何人の……いや、何百人の女を泣かせて来たんだろう」

「馬鹿を言うな。女は、師匠一人さ」

「嘘ばかり……あつ、また、こんなになって来た」

「満足して、骨が蕩けたんじゃないのかい」

呆れたような顔で、龍念が言う。

「だって、もったいないじゃないか。せつかく、巨きくなつて来たのに……」
妖艶な年増女が、その膨れ上がった先端に紅唇を近づけた時、

「——龍念さんっ」

入口の戸を乱暴に叩いて、若い娘の声がした。怒つたような声だ。

「須田町の三沢屋さんから、お使いが来てますよ！ お嬢さんのお通夜ですつて！」

「おうっ」

全裸のまま、龍念は、勢いよく立ち上がった。

「きやつ」

菊丸は後ろへ引っくり返つて、大事な部分を曝け出してしまふ。

がらりと障子戸を開けると、そこに立っていた可愛い娘が、「いやっ」と両手で顔を覆つた。龍念の半勃ちの巨根が、剥き出しになつていたのである。

この娘が、お光である。

「ほいっ、御免よ」

共同井戸の前へ行つた龍念は、水を汲み上げて、頭から被る。

「淫みだらな匂いをさせていては、仏様ほとけさまに失礼だからな。はっはっは」

そう言つて、何杯も水をかけた。

お通夜坊主ほうず——それが、この龍念の稼業なのである。

徳川とくがわ十一代將軍・家齊いえなりの治世ちせい——文政年間ぶんせいの初秋しよしゅうであつた。

二

須田町は水菓子屋みずがしが蝟集いしゅうしている所であるが、三沢屋は、その中でも五本の

指に入る大店おおだなであつた。

水菓子とは、果物くだもののことである。

菓子とは——元々は、木の実や果実を示す言葉であつた。

それが、中国から入つて来た点心てんしんを、〈唐菓子とう〉と呼ぶようになったので、

それと区別するために、木菓子きとか水菓子という呼称が生まれたのである。

その後、点心を和風に改良したもの——つまり、現在の和菓子のことを〈菓

子〉と呼び、果物の方を水菓子と呼ぶことが、定着したのだつた……。

「――御免」

半ば閉じられた三沢屋の表に立った龍念は、声をかけた。よく響く低音であつた。

水浴びで軀を浄め、頭と髭は剃つてある。

墨衣に袈裟をかけた姿は、とても長屋の坊主には見えない、立派な押し出しであつた。

出て来た若い手代は、龍念の貫禄に気圧されたように、丁重に奥へ案内する。「お嬢さんは、長患いだったのですかな」

「いえ。今朝までは、お元気だったのですが、届け物に行つたお得意先で倒れられ、そのまま急死なさいました」

「それは、それは……」

茶を一杯貰つた龍念は、すぐに、娘が置かれた座敷へ通された。

型通りの、逆さ屏風に北枕の床に、顔に白布をかけられた遺体が寝かされてゐる。

須田町小町といわれた十六歳のお弓の、亡骸であつた。普通は顔だけを覆うのだが、胸元まで覆う大きな白布がかけられていた。

娘の枕元には、沈痛な表情の主人の勘右衛門と、虚脱したような妻のお波の

二人が、座りこんでいた。

密葬なので、弔問客はいなかった。

「この度はどうも、突然のこと——」

勘右衛門夫婦に挨拶した龍念は、大きな数珠をまさぐりながら、枕経を唱える。

このように——お通夜坊主とは、突発的な通夜に、菩提寺の僧のピンチヒッターの役目を果たすものだ。

通信網と交通手段が未発達な江戸時代においては、翌日の葬儀はともかく、死亡当日の通夜には間に合わないことが、多かったのである。

そのため、お通夜坊主は何でも一通りの宗派の経文をこなせなくては、務まらなかった。

だから素人には無理で、大抵は、戒律を破って寺を追い出された破戒坊主の

仕事になっている。

恰幅がよい龍念の朗々たる誦経に、三沢屋勘右衛門は、この大男を見直したような顔になった。

お波の方は、溢あふれる涙を手拭てぬぐいで拭いながら、水晶すいしやうの数珠を握りしめる。
奉公人ほうこうにんたちも廊下に座り、下女げじよたちは啜すすり泣いていた。

誦經を終えた龍念が振り向いて、勘右衛門に頭を下げた時、

「う……………っ」

突然、お波が左の胸を押さえて、畳に突っ伏してしまった。

「お、お波っ」

「おかみさんっ！」

「いつもの心の臓しんぞうの発作だ、早く、宗伯先生そうはくを迎えに行けっ」

新仏にいほとけの前で、新たな騒動が起こったのである。

皆が総がかりで、お波を抱き起こして寢間へ連れて行つたので、その座敷に残つたのは、龍念と遺体だけになった。

「……………」

ぎろりと両眼を光らせた龍念は、耳をすまして、家中の気配けはいを計はかった。それから、さっと遺骸いがいの白布を剥はぎとる。

「むっ」

生前は美しかったであろうお弓の顔は、断末魔だんまつまの苦悶くもんに、醜みにくく歪ゆがんでいた。

死化粧がほどこされているものの、その形相は到底、隠しようがない。

さらに、白粉を塗ったくった細い喉にどす黒い跡が残っているのを、龍念は発見した。明らかに、何者かに手で絞められた時についた指の跡であった。

ほんの少しの間、龍念は考えてから、白布を元に戻すと、上掛けの裾から手を入れる。

廊下や庭に気を配りながら、冒瀆的にも、死骸の股間に指を入れた。

冷んやりと湿った女華の内部をまさぐっていると、廊下を足音が近づいて来た。

龍念は素早く、左手を引き抜く。

やって来たのは、先ほどの手代の松吉であつた。

「ご苦労様でした。本来なら、一杯差し上げるところですが、ご覧になったような次第ですから……これを」

差し出された布施を、龍念は片手拝みに受け取ってから、

「それから、先ほど、わたくしが申し上げたことは、どうぞご内聞に」

「はい、はい。承知しております」

外へ出た龍念は、曲り角で足を止めて、三沢屋の方をうかがいながら、袂の